

CITATION: Kelly AJ, Kavanagh J, Thomas J. *Cochrane Database of Systematic Reviews* Cochrane Pregnancy and Childbirth Group, Issue 2. Art. No.: CD003103. DOI: 10.1002/14651858.CD003103
CRG名: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 30 May 2003
Clib issue No.; N/U: 2001 Issue 2; New

アブストラクト

背景: リラキシンは、2つのアミノ酸鎖から成る蛋白ホルモンである。リラキシンがヒトの妊娠および分娩で果たす役割は不明である。リラキシンの子宮頸管熟化薬としての使用および効果について、1950年代から議論されている。ヒトリラキシンの主な供給源は妊娠黄体であるため、分娩誘発に関する初期の合成リラキシンは、ブタやウシの製剤に焦点を当てたものがほとんどであった。DNA組換え技術の出現により、ヒトリラキシンの評価が可能になった。リラキシンには子宮頸管熟化の促進効果があると考えられている。ヒトの子宮筋の活動の抑制効果を有する可能性があるため、その他の分娩誘発薬で付随して見られる子宮過剰刺激の発現率の上昇は、リラキシンでは見られないと考えられる。本レビューは、標準化された子宮頸管熟化および分娩誘発法に関する一連のレビューの一環として行われたものである。

目的: 妊娠第3三半期の子宮頸管熟化または分娩誘発での効果を、リラキシン(精製ブタリラキシンおよび組換えヒトリラキシン)とその他の分娩誘発法との間で比較評価すること。

検索戦略: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group's Trials Register(2003年5月)および関連論文の文献を検索した。2009年8月13日に本検索の更新を行い、その結果を分類待ち区分に追加した。

選択基準: 妊娠第3三半期の子宮頸管熟化または分娩誘発上で、リラキシンとプラセボ/無治療、またはあらかじめ規定した分娩誘発法リスト中のその他の方法とを比較した臨床試験。

データ収集と分析: 分娩誘発に関する大量かつ複雑な試験データに対処するため、データ抽出を2段階に分けるなどの方法をとった。

主な結果: 9件の研究を検討し、5件を除外し、合計267例を対象にした4件を選択した。いずれの研究でも、胎児心拍数(FHR)の変化を伴う子宮過剰刺激の発現例の報告はなかった。帝王切開率について、リラキシン投与例とプラセボ投与例との間に差があったことを示すエビデンスはなかった[試験4件257例、15.3%対14.2%、相対リスク(RR)0.79、95%信頼区間(CI)0.42~1.50]。リラキシンで誘発すると、子宮頸管の熟化不良または不変のリスクは低下した(試験3件371例、21.9%対49.3%、RR 0.45、95%CI 0.28~0.72)。FHR変化を伴わない子宮過剰刺激例の報告はなかった。

レビューアの結論: リラキシン(精製ブタリラキシンまたは組換えヒトリラキシン)の分娩誘発薬または子宮頸管熟化薬としての位置付けは不明である。現行の臨床診療におけるリラキシンの真の効果を評価する試験が、さらに求められる。

[注意: 本レビューの分類待ち区分の3件の文献を評価すると、本レビューの結論が変わる可能性がある。]

平易な要約(Plain language summary)

子宮頸管熟化および分娩誘発におけるリラキシン

リラキシンが子宮頸管熟化および分娩誘発に役立つことを示すエビデンスは十分ではありません。

(監訳 江藤 宏美)

翻訳公開日:2015年 1月 27日

ご注意:この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。